

が大部分を占め、本生譚から取つたものは、非常に數を減じ、又、分骨の事あつて後のものから取つたものは影を潜めてゐる。

他方、佛陀の様式を他に於て、二次的ではあるが、西北方の印度ギリシア風の美術には少くとも、何等人物に佛敎的圖像形式を加へた所はない。蓋し、魔神、夜叉女、諸神の如きは、已に古代派に見るのであり、嚴密にいへば、菩薩についても同様であつたともいへるので、少くとも菩薩を現はしてゐる時には、菩薩の前生としての太子たるものである。

第九に、第四乃至第六世紀の中國の笈多派に於ては、大乘を以て稱せられる新佛敎々理の認める新しい群像を殊更に具體的形式で、實際に現はす事を専らとした様である。然し此の頃に於て、彫像術の發達著しいものがあり、之と相關係して、少くとも彫刻では、説話の場面を寫す事が稀になつたと思へるので、僅かに、之等は、四或は八奇蹟を一緒に彫つた板彫に見るに過ぎないのである。

第十に、之等の八奇蹟が、ネパールの細畫を別にしては、摩揭陀とベンガ